

Interview

駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第21回 ジャマイカ

クレメント・フィリップ・リカード・アリコック
駐日ジャマイカ大使

北米を睨んだ有望投資先

— 西半球で米・加に次ぐ英語人口 —



ジャマイカのアリコック大使は、このほどラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、日本との二国間関係、ジャマイカ投資の有望分野、本年4月に誕生したホルネス新政権の課題と重点政策、ジャマイカ経済の現況、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた

両国間協力等について見解を表明した。

アリコック大使は在マイアミ（米国）総領事、外務・外国貿易省儀典長、二国間関係局長などを経て2013年9月より現職。

インタビューの一問一答は次のとおり。

— 大使は日本に着任されて3年余りになりますが、日本についてどのような印象をお持ちですか？
これまでの日本滞在で最も印象深い思い出は？

大使 私は日本国民に感銘を受けていると言いますか、魅惑されており、また勇気づけられています。日本にはその文化を育て、維持する強い伝統があります。そしてその文化が繁栄の時も苦難の時も何世紀にもわたって国民に力を与えてきました。日本国民が独自の芸術や料理を大事にするその仕方は独特です。そしてそのようにして自分たちの遺産の良いところ、素晴らしいところはすべて残そうとしています。

日本滞在中で最も印象深かったのは、これまで多くの県を訪れましたが、各県が芸術の面でも農産物の面でも他の県とは異なる特徴を備えていることです。全国にわたってこのような素晴らしいかつ友好的な競争を繰り広げていることは個人にとってもベスト

を尽くすためのインスピレーションになっていると思います。またより具体的に私の最も印象的だった体験は富士山に登頂したときです。もちろん私自身の登頂の喜びもさることながら、驚いたことは大勢の80歳代、90歳代の方々が登頂を果たされていたことです。また途中でお目にかかった現役引退者の皆さんがなんらかの目標を持って頑張っておられる姿に大いに励まされました。これは目標を達成するために年齢や環境の限界をも克服しようという日本人の精神力を象徴していると思います。これはこの国の未来を楽観できる源と言ってもいいでしょう。

— 日本とジャマイカの二国間関係についてどう見られますか？

大使 ジャマイカと日本の外交関係は52年前に始まり、極めて友好的な関係を維持してきましたが、その関係は益々強力になりつつあります。両国間では

学生交換、災害対策、言語訓練、疾病予防、中小企業育成、文化啓発および保健分野の改善等を含む広範な技術協力が行われています。また両国はスポーツの分野における協力関係も近年著しく進展しています。また日本はJETプログラムを通しこの16年間ジャマイカから多数の英語教師を受け入れてきました。

— **ブルーマウンテン・コーヒーは日本でも有名で、日本はジャマイカの産出量の85%を輸入していますが、両国間貿易はジャマイカの大幅入超になっています。将来的にどのような日本との貿易関係を期待されますか？**

大使 現在、日本はジャマイカが生産するブルーマウンテン・コーヒーの約65%を輸入しています。われわれはジャマイカの産品が日本から高く評価されていることを非常に嬉しく思っています。ところで、“ブルーマウンテン・コーヒー”というのはジャマイカから輸入されたもののみが本物です。フランスのシャンパンと同様に、ブルーマウンテン・コーヒーはジャマイカ以外の国から入ってきたものは本物ではありません。ジャマイカは日本によるブルーマウンテン・コーヒーの輸入によって被益していますが、日本はジャマイカに対し大量の車を輸出しています。ジャマイカにおける車の90%以上は日本製です。日本の人口は125百万人、ジャマイカは2.8百万人です。両国の人口及び経済規模の不均衡に鑑みますと両国の貿易バランスが均衡するということは先ず考えられません。しかしジャマイカの生産者としては、日本人がジャマイカの料理に関心を寄せていることもあり、ジャマイカ特産の食料品の対日輸出を増大させたいと考えています。

— **日本からの進出日系企業は約18社（2015年）と聞いていますが、ジャマイカに進出すれば成功するだろうと思われる業種はありますか。**

大使 ジャマイカで成功するであろうと思われる業種としては、巨大な北米市場をターゲットにしたジャストインタイム生産およびオンデマンド・デリバリーの軽工業を設立することが考えられます。またジャマイカはパナマ運河拡張によって生じる需要にマッチするためのロジスティック・ハブとしての地位にも相応しいと思います。さらに世界最大の英語圏市場に近接しているため、ジャマイカは低コスト

で効率的なバックオフィスないしコールセンターを設置するところとしては最高の場所でしょう。米、加に次いでジャマイカは西半球において英語を母国語とする人口の最も多い国です。

— **日本のジャマイカに対する経済技術協力をどう見ておられますか。今後どのような分野で、どのような協力を期待されますか？**

大使 ジャマイカは日本のこれまでの経済技術協力にとっても感謝していますが、両国間関係のすそ野を広げるという意味で、例えば次のような分野でサポートを得られればジャマイカの開発計画に資するところ大ではないかと思えます。例えば、職人技術と製造・マーケティング、農業経営、エネルギー管理、防災と緊急対策、初期エコシステムなどです。

— **本年2月に実施された総選挙において野党ジャマイカ労働党（JLP）が勝利して4年ぶりに政権に返り咲き、党首のアンドリュー・ホルネス氏は2度目の首相に就任しました。現政権の政策課題と重点政策は如何でしょうか。**

大使 ジャマイカ新政権の直面する課題は大半の途上国とほぼ同じと言えるでしょう。すなわち経済成長と国民の生活水準の向上です。ホルネス首相は、同政権の目的及び綱領はすべてのジャマイカ人に繁栄をもたらすことであると公式に表明しています。そのためにホルネス政権は大小を問わず投資を促進するような環境を整備するための努力をしたいとしています。これには中小企業振興計画の強化、徴税プロセスの合理化および企業家精神の増大と輸出志向産業の奨励を含みます。

— **ジャマイカ経済は、サービス業がGDPの60%以上を占め、外貨は、観光業、海外移住者からの送金、鉱業（ボーキサイト、アルミナ）に大きく依存しています。中国経済の減速、資源価格の下落等もあり世界経済の先行きには不透明感が漂っていますが、ジャマイカ経済の現状と今後の見通しはいかがですか。また、債務問題は引き続き重要課題の一つかと思われませんが、現状は如何ですか。**

大使 そのとおりです。ジャマイカ経済は観光、鉱業および外貨送金への依存度が大きいですが、しかし中国経済の減速、資源価格の下落等にもかかわらず、ジャマイカはどちらかと言えば楽観的です。工業分

野で新規投資のコミットメントがありましたし、観光客数も着実に増えています。そして予見される今後についてもこの趨勢は続くと思っています。しかしジャマイカは外貨獲得源を多角化し、経済的にも財政的にも持続可能な状態にするべく努力しています。ジャマイカ政府は最近、経済の安定、債務の削減および成長のための条件を整えるための経済改革プログラムを策定しました。これは民間分野の発展を支援する国際通貨基金 (IMF)、国際金融公社 (IFC) および多数国間投資保証機関 (MIGA) の協力を得て達成できました。この改革プログラムは成果を生み始めています。“Doing Business 2015” のランキングで、ジャマイカは世界 189 の経済において 27 カ国を飛び越え 58 位になりました。投資家が新興市場から撤退している 2015 年に、ジャマイカは国際資本市場において 20 億米ドル調達し、また債務も GDP 比 146.9% から 126% に減少し、これは日本、ギリシャ、レバノンおよびポルトガルより低い水準です。もちろんジャマイカは石油やダイヤモンドのような地下資源に恵まれていないため、僥倖に期待するわけにいかず、イノベーション、勤勉、忍耐、国内的・国際的協力によって地道に頑張るほかありません。16 年第一四半期に 126% の削減を達成し、17 年までの債務削減目標 126.5% を超えましたので、この下方傾向は今後も維持できると思います。

― 冬季オリンピックのボブスレー競技にジャマイカ・チームが日本製そりの採用を決定したとのニュースは日本でも大きな話題になりました。また、最近鳥取県とウエストモアランド県の間で姉妹都市提携が署名され、両県は 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックで互いに協力し合うことになったと聞きましたか。

大使 そうです。鳥取県とウエストモアランド県の間で交流が活発化しているのは非常に明るいニュースです。鳥取県は 2007 年と 15 年、それぞれ韓国および中国で行われた世界陸上競技選手権大会の前にジャマイカの陸上選手を受け入れてくれました。両大会においてジャマイカは例外的な好成績を収めました。この成功は鳥取県のおもてなしと便宜供与のお陰であると考えました。もちろん我々としては世界中が 20 年のオリンピック及びパラリンピックに注目している折から今後も鳥取県と協力できることは非常に幸せです。

同様にジャマイカとしては 18 年の冬季オリンピックに向け、下町ボブスレー・プロジェクトで日本とパートナーを組めることを喜んでます。日本の技術とジャマイカのスポーツの才能および訓練との結合は必ずや勝利をもたらす組み合わせであると確信しています。また、この協力関係は今後のジャマイカと日本の多くの分野における協力を約束する指針となるでしょう。

ジャマイカと日本には多くの共通点があります。その顕著な例は精神面の弾力性と創造力ではないでしょうか。それ故に世界経済の挑戦にもかかわらず両国の将来は明るく、それは今後いろいろな点で明らかになるであろうと確信しています。

(インタビュアー ラテンアメリカ協会副会長 伊藤昌輝)





『大統領の冒険 —ルーズベルト、アマゾン奥地への旅』

キャンディス・ミラード カズヨ・フリード・ランダー訳 エイアンドエフ
2016年4月 475頁 2,600円+税 ISBN978-4-9907-0653-1

セオドラ・ルーズベルトは1904年に米国大統領に再選された際に再出馬はないと公言したにもかかわらず、12年の大統領選挙に所属の共和党を離れ新党から立候補し惨敗し、しかも共和党のタフト大統領の再選をも妨げた。非難を浴び失意から隠遁した彼に南米4カ国での講演とアマゾン学術調査旅行の話が持ち込まれた。1913年10月ニューヨークを出航した時には、元大統領の旅行は多くの人沢山の物資による大遠征隊となっており、二男のカーミットをブラジルのバイアで乗せ、自然歴史博物館の推薦するアマゾンに詳しい鳥類学者シェリー等の科学者も加えていたが、ブラジル政府はアマゾン地域の探険に半生を費やしてきたロンドン大佐（現在の国立インディオ財団 (FUNAI) の前身の原住民保護局の初代局長となり、ブラジル北西部のロンドニア州は彼の名を採った）に同行を命じた。また、外相はルーズベルトに当初の計画旅程ではなく未開の「謎の川」下りを薦めたことから、この旅行は困難と危険をともなう探険旅行に変わった。

12月にブラジル西南のコロンバで共同指揮官となったロンドン大佐と合流し遠征が始まったが、米国から持ち込んだ現地にそぐわない物資が多過ぎて始めから出発が延び延びになり、やっと謎の川の出発点に到達したが人員と物資を絞り込み、ジー・パラナ川探検隊と分けざるを得なくなった。2月初めに隊員と人夫で川下りを始めたルーズベルトとロンドンの率いる隊は、先住民の攻撃にさらされ、急流に阻まれ、食料不足に苦しみ、マラリアや赤痢をはじめとする病気や怪我、昆虫や肉食魚、毒蛇等に身体を傷つけられ、ついには人夫の一人による同僚の射殺を含め死者まで出る苦境の中で、ルーズベルト自身も病と傷口の化膿が悪化した。なんとかゴム採取人が入り込んで来ているところまで辿り着き、さらに急流の川下りの試練が続いたものの、やっと4月26日にロンドン大佐の部下が救援物資を携えて溯行したキャンプまで到達した。

その3か月後、1914年5月19日にニューヨークへ帰還したルーズベルトは英雄として迎えられたが、一方で1,600km近い謎の川を発見したのはでっち上げだとする中傷と体調の衰えに悩まされた。ニューヨークとロンドンでの講演で中傷に論駁し遠征の成果を証明した。後にブラジル政府は謎の川を「リオ・ルーズベルト」と名付けたが、ポルトガル語で発音し易い「リオ・テオドロ（セオドロ川）」とも呼ばれている。探険中彼を死の瀬戸際まで追い込んだ高熱と感染症から19年1月に60歳で波瀾に富んだ生涯を閉じた。

著者は『ナショナル・ジオグラフィック』誌の記者・編集者も務めたジャーナリストで、アマゾンの自然描写・解説も詳しい。ただポルトガル語発音表記やカトリックの神父を牧師と訳した部分が混在するなど、訳・校閲のミスが散見されるのは残念である。

〔桜井 敏浩〕